



## 手話の思い出

昨日の手話の学習はなかなか楽しかった。13Rの諸君が積極的に舞台に登場しなかったのはちょっと残念だったが、登場した諸君は（一部の目立ちたがりはずぐに分かってダサかったものの）、訥々とした手話も面白かったし、表情豊かで上手な手話は見えてなかなか魅力的であった。

驚いたのは、君たちの飲み込みの早さである。どのケース・スタディでも、複数の動作（手話）が出て来ていたし、特に最後のケース・スタディの時は、ヤマほど手話の動作があって、しかも演じる会話が長文になっていたにも関わらず、登場した諸君はほとんど一度でその動作を覚え、それを分かるように演じていたのですっかり感心してしまった。

例えば「避難する」の動作では、舞台上で背負い投げの動作をして、「(避難するために荷物を背負うのだから)背負い投げとは動作が逆向きですよ」とアドバイスを受けていた男子がいたが、私もまったく同じで背負い投げ方向の動作をしていた。つまり、私などは手の動作を真似ようとしてもなかなかうまく真似られず、手の表・裏の向きが反対だったり、前後の動きが逆になったり、左右の動きが逆になってしまったりするのである。想像するに難くないであろうが、恐らく同じような理由からか、ダンスもまったくダメである。ダンスが上手な人は、相手の動きを見て、自然にその動きを真似することができるのだろう。羨ましい限りである。

\*

かつて、武田真治と菅野美穂主演の「君の手がささやいている」というドラマがテレビ朝日系列で放送されていた（1997年～2001

年）。私の前任校には「福祉コース」という系列があった関係で、私も教材として見たことがある。武田真治は、ある会社のエリート社員（だったかな？）という役柄で、健常者である。その会社に働きにきた聴覚障害者という役どころを菅野美穂が演じていた。二人はお互いに惹かれあい、周囲の無理解を乗り越えて最後には結婚するのだが、その途中で印象的な場面があった。

それは、夜の駅のホームで二人が手話で会話を交わす場面。二人が互いを意識し始めた頃のこと、偶然反対側のホームにそれぞれの姿を見つけた二人は、線路を間にはさんでぎこちない会話を交わそうとする。こういう時、健常者なら大きな声で呼びかけるしかないだろうが、二人は手話で会話を始めるのである（武田真治演じる会社員は、彼女に興味を持つようになってから手話を勉強していた）。効果音も一切消され、余計なBGMも何も流れない中で、二人が手話で心を通わせる様子だけが淡々と画面に映し出される。しかし、その何の音もない中に映し出された二人の美しい手の動きは、若い二人の瑞々しい思いを伝え、そして、大きな声で愛を叫ばなくても、しっかりと思いを届けることができることを伝えて感動的であった。

\*

手話を始めると、いかに我々が大きな声を出しているかに気づかされることもあるそうだ。そんなに大きな声を出さなくても、本当に大切なことは伝わる。本当に伝えたいこと、共有したいことは何なのか、そんなことを手話は考えさせてくれるのかも知れない。